

ご遺族の皆様並びにご来賓の皆様のご臨席のもと、令和6年北海道胆振東部地震厚真町追悼式を挙げるにあたり、町民を代表して、謹んで式辞を述べさせていただきます。

北海道で初めて震度7を記録した平成30年北海道胆振東部地震から、昨日9月6日で6年が過ぎました。昨日は、町内4ヶ寺合同による7回忌法要が厳かに執り行われましたが、最愛のご家族やご親戚、ご友人を失われた方々のお気持ちを思うと、尽きることのない悲しみが胸にこみあげてまいります。改めてこの震災で犠牲となられた37名の方々に衷心より哀悼の誠を捧げます。

在天の光となった皆様には、愛してやまなかったこのまちの復旧・復興の様子はどのように映っているのでしょうか。実直で優しい方々ばかりでしたので「道を誤るな、易きに流されるな、誠実に生きろ、いやいや、健康が一番、助かった命を大切に」との激励の言葉や私達を気遣う言葉が聞こえてくるようではありますが、皆様が思い描いていた未来や希望を実現するため、全町民が協働の力を発揮し、一丸となって必ずやこの難局を乗り越えてまいります。

発災以来、捜索活動や復旧業務に当たられた多くの関係機関や大勢のボランティア、様々な分野のエキスパート、そして温かいご支援の輪を広げていただいた全国の皆さんに支えられ、私たち厚真町民は、震災に埋もれた悲しいまちで終わらせない覚悟と再び輝きを取り戻す決意を持って歩みを進めまいりました。全町民が被災者となりながらも、日常を取り戻すため、これまで懸命に努力重ねてこられた全ての方々の日々に思いを馳せ、改めて敬意と感謝を申し上げます。

災害復旧は本年3月をもって国直轄の砂防事業、かんがい排水事業が竣工し、北海道施行による治山事業も計画通り進められています。北海道と厚真町が中心となって施行している森林再生は概ね計画通りの進捗状況ですが、心のケアと同様に長い年月を要するものと考えており、引き続き丁寧に様々なアプローチを続けてまいります。

世界秩序が混迷する一方で、国内経済は緩やかな回復基調にあり、北海道においても近郊で明るい話題が続いています。本町においては、現在、復旧と並行して復興への取り組みにも挑戦していますが、一方で、いつ起きてもおかしくない自然災害に対する備えにも最優先課題として向き合っています。庁舎周辺整備や防災・減災対策、エネルギー地産地消や省エネルギー・創エネルギー・吸収源対策を官・民・学で総合的に取り組んでいくカーボンニュートラル政策を展開し、着実に実装しながら復興の新たな骨格としています。他に、新たな国土形成軸である二地域居住政策を活用した厚真町が持つリソースの最大化、分野別IoT技術の導入やSociety5.0、DXなど社会革新を積極的に

取り込みながら次世代の未来創造に挑戦してまいります。

私も自然災害の語り部として様々なところで講演を重ね、体験と教訓の伝承に努めてまいりましたが、本年1月元旦に発生した能登半島地震と関連する事故は、その被害の甚大さとともに、予測不能な運命に大きな衝撃を覚えました。近年ではさらに巨大な地震災害をもたらすことが予想されている日本海溝・千島海溝周辺や南海トラフでの海溝型地震災害に対する警鐘が鳴らされています。気象変動も激しさを増すなか、全国的に大雨災害などが多発しており、8月末には本町においても、記録的な豪雨に見舞われ、収穫間近な圃場が大きな被害を受けました。全国各地で頻発・激甚化する災害に備え、これからも防災・減災対策に全力で取り組んでいかなければなりません。

これから先も新たな困難に直面すると思いますが、折に触れ、被災地だからと言って立ち止まってはならないと決意を新たにしている私たちだからこそ、「誰一人として取り残さない」を合言葉に、本町が胆振東部地震からの復旧・復興とその先の時代に、「強靱でしなやかなまち」、「挑戦を諦めないまち」として輝いていられるよう、未来創生と持続的発展に向けた歩みを着実に進めてまいります。

こうしてご遺族並びにご来賓、震災尽力者の皆様にご臨席いただきましたこと、改めて心より感謝申し上げます。結びに、犠牲となられた37名の御霊が永遠に安らかならんことをお祈り申し上げますとともに、ご遺族の皆様のご平安とご健勝を心から祈念し、式辞といたします。

令和6年9月7日

厚真町長 宮坂尚市朗